

I 出発からブザンソンへ

8 月 4 日早朝、長いフライトを終えてパリに到着しました。リヨン駅から TGV に乗り換えると、車窓から見える景色が次第にパリの都会から緑豊かな田園に変わっていきます。研修への緊張と期待で胸がいっぱいになりながら、約 2 時間半後にブザンソン駅に到着しました。

II ブザンソンの街並み

ブザンソンは小さく静かな街ですが、歴史と自然が調和していてとても魅力的です。石畳の道や川沿いの散歩道、丘の上にそびえるシタデル（城塞）が、滞在中の私の散歩コースとなりました。研修の合間に街を歩くだけで、心が落ち着き、学びへの集中力を取り戻せました。



III 研修の内容と体験

研修は「授業実践の充実（Enrichir ses pratiques de classe）」をテーマに、毎日朝から夕方まで行われました。午前は理論と方法論、午後はワークショップやフォーラムという構成で、実践的な学びが中心でした。

Module 1 : Dynamiser les pratiques de l'écrit（筆記活動を活性化する）

講師の Francine Beissel 先生は、書くことを「負担」ではなく「遊び」にする方法を示してくださいました。例えば、学生同士でリレー形式に文章をつなげる活動や、短い詩やキャッチコピーを作る練習を行いました。

実際に体験してみると、自分でも思いがけない表現が出てきて、書くことに対する心理的なハードルが下がるのを実感しました。日本の授業でも「作文＝評価されるもの」というイメージが強いので、この「遊び心ある書き方活動」をぜひ取り入れたいと思いました。

Module 2 : Introduire des activités ludiques en classe (遊び的要素を授業に取り入れる)

この活動はまさに「フランス語で遊ぼう！」という雰囲気での授業でした。1回の授業の中で、レベルや目的の異なる複数のアクティビティを体験し、私たち研修生自身が生徒役となって参加しました。Beissel 先生が紹介してくださった活動は、単なるゲームではなく、学習者同士のやり取りを自然に促し、結果的に「話さざるを得ない」状況を作り出すものが多かったのが印象的でした。特に心に残ったのは、フランス語教育に応用できる複数のカードゲームが紹介されたことです。ルール自体はとてもシンプルですが、活動の中で「自分の持っているカードを説明する」「相手に質問をする」といった発話が自然に生まれ、気づけば学習者同士のやり取りが活発になっていました。私自身、普段は人前でフランス語を話すことに少し苦手意識がありますが、ゲームの枠組みがあることでリラックスして参加でき、楽しみながら発話できたのは大きな発見でした。一方で、実際の教育現場で応用するには「カードゲームで遊べるくらいの語彙量」を学習者に与える必要があることも痛感しました。退屈になりがちなインプットをどのように授業に組み込むかが、今後自分にとって大きな課題になると感じました。大変さはありませんでしたが、それ以上に「楽しい活動が学びにつながる」という確信を得られた貴重な体験でした。

Module 3 : Enseigner avec le théâtre, le mouvement et la gestualité (演劇・身体表現を通じた教授法)

講師の Marjorie Heinrich 先生の授業では、最初に輪になって体を動かすアクティビティから始まります。声のトーンを変えて同じフレーズを繰り返したり、身振りを加えて意味を広げたりする活動を通して、「身体を使うことで言葉が生きる」ことを実感しました。私自身、普段は静的な授業が多かったので、最初は少し恥ずかしさがありましたが、他の参加者と一緒に演じるうちに、自然に笑いとりズムが生まれ、クラス全体が一体感に包まれていきました。この体験から、言語活動に「身体性」を加えることの大切さを学びました。

Module L : Motiver les ados (思春期の学習者の動機づけ)

この活動では「どうすれば思春期の学習者を授業に引き込めるか」というテーマで、非常に実践的なアイデアが紹介されました。授業は「生徒が興味を持つ話題から始める」「短時間で成功体験を与える」「仲間とのやり取りを重視する」といった観点で組み立てられており、実際に研修生である私たちが生徒役となって活動を行いました。Heinrich 先生が紹介

してくださった活動は、SNS 風のプロフィール作成や、好き嫌いを表現するシンプルなゲームなど、思春期の学習者が「自分のことを話したい」と思えるような工夫が多く含まれていました。

私が特に驚いたのは、Heinrich 氏が「授業の最初の 5 分で生徒を笑わせることができれば、その日の雰囲気は大きく変わる」と強調していた点です。確かに自分自身が活動に参加してみると、最初にリラックスした空気が生まれることで、その後の発話も自然に続けられることを実感しました。

一方で、この授業を受けながら私は「日本の高校生にとっても同じ方法が有効なのだろうか」と考えました。例えば、自分の授業では「学習者が本当に話したいと思えるテーマ」をまだ十分に取り入れていないかもしれないと気づかされました。思春期の学習者は時に反応が薄く、授業の進行に戸惑うことも多いのですが、このモジュールで学んだように「まずは彼らの興味に寄り添う」ことを意識するだけでも大きな違いがあるのではないかと感じました。

IV 未来に参加する方へのチェックリスト

渡航・準備

- パリからブザンソンまでの TGV チケットを事前に確認しておく
- 乗り換え時間に余裕をもたせる（特にリヨン駅は広く人が多い）
- CDG 空港の Western Union で奨学金を受け取る場合、B 線や TGV 駅のすぐそばにある支店を利用（Google マップの案内は正確でないことがあるので注意）
- 朝晩用に軽い上着を準備（夏でも肌寒い日あり）
- 基本の調味料（醤油・塩・インスタント食品など）を持参
- 常備薬・解熱剤などを必ず持参（実際に研修中に体調を崩した経験があり、とても役立つ）

研修・学び

- 授業でよく使うフランス語キーワードを事前に確認
- 間違いを恐れず積極的に発言する心構えを持つ
- 紹介されたアクティビティをすぐ授業に応用できるようノートに整理
- フォーラムでは自分の授業経験もシェアして交流を深める

生活・交流

- 世界各国から来る研修生と積極的に話しかける（フランス語が共通言語）
- 昼食は学食やカフェで仲間と交流する時間を楽しむ
- 週末にシタデルや旧市街を訪れ、リフレッシュする
- 現地で感じたことを日記やメモに残す（帰国後の授業報告や活用に役立つ）

V まとめ

今回の研修は、授業に新しい手法を取り入れるヒントを与えてくれただけでなく、自分自身の「教師としての姿勢」を振り返る機会でもありました。特に、「遊び心」と「身体表現」を組み合わせることで、言語がより生き生きと伝わることを体感できました。また、国際的な仲間と共に学び合う時間は大きな刺激であり、今後の授業実践や研究活動の糧になると確信しています。今回の夏季スタージュに参加する機会をいただけたことに、心から感謝しています。フランス語教育学会、フランス語フランス文学会、そして国内スタージュ運営委員の皆様のおかげで、私はこの 2 週間をブザンソンで過ごし、多くの学びと出会いを得ることができました。

また、渡航準備の段階からいつも丁寧にご対応くださった在日フランス大使館、特に文化部の萩尾様には、本当に大きな支えをいただきました。キャンパス・フランスの方々にもさまざまな場面で助けていただき、安心してフランスに向かうことができました。そして現地で温かく迎えてくださった CLA の講師の先生方、スタッフの皆様。授業の合間にかけてくださる一言や、笑顔でのサポートが、慣れない環境の中で大きな励みになりました。皆さんのおかげで、この研修は学びだけでなく心に残る思い出となりました。今回得た経験を、これからの授業や研究に少しずつ還元していけたらと思っています。本当にありがとうございました。

CR du stage d'été à Besançon

(4–15 août 2025, CLA – Université de Franche-Comté)

JIANG Qing

En août 2025, j'ai participé au stage d'été pour enseignants de français organisé par le CLA de l'Université de Franche-Comté. Après un long voyage jusqu'à Paris puis un trajet en TGV, j'ai découvert Besançon, ville calme et verdoyante dont la Citadelle et les ruelles pavées offrent un cadre idéal pour l'étude.

Le stage avait pour thème « **Enrichir ses pratiques de classe** » et associait théorie, ateliers pratiques et forums d'échanges.

- **Écrit** : avec Francine Beissel, nous avons expérimenté des activités d'écriture créatives (textes en relais, slogans), qui rendent la production écrite plus ludique.
- **Jeux** : plusieurs jeux de cartes adaptés au FLE ont montré comment stimuler la communication spontanée sans crainte de l'erreur.
- **Théâtre et mouvement** : avec Marjorie Heinrich, nous avons appris à utiliser le corps et la gestualité pour libérer la parole et renforcer la dynamique de groupe.
- **Motiver les ados** : ce module a souligné l'importance de capter l'attention dès les premières minutes et de proposer des thèmes proches de leurs centres d'intérêt (profils façon réseaux sociaux, jeux sur les goûts).

La vie quotidienne à Besançon – résidence, repas partagés, balades le long du Doubs – a enrichi cette expérience. Les forums ont favorisé des échanges stimulants entre enseignants venus du monde entier.

Conseils pratiques : Récupérer la bourse à l'agence Western Union de CDG (près du RER B/TGV), prévoir une veste légère, quelques condiments et des médicaments

personnels. Oser parler sans crainte et prendre des notes détaillées aide à réinvestir les activités.

En conclusion, ce stage m'a permis de repenser ma pratique et de renforcer ma motivation. J'exprime ma profonde gratitude aux associations savantes japonaises, au comité d'organisation, à l'Ambassade de France au Japon (en particulier Mme Hagio), à Campus France, ainsi qu'aux enseignants et au personnel du CLA pour leur soutien et leur accueil chaleureux.

CLA スタージュ 報告書

関大聡

はじめに

2025 年 8 月 4 日から 14 日までフランス・ブザンソンのフランシュ=コンテ大学付属応用言語センター（CLA）主催のフランス語教員研修に参加した。本報告書では研修（スタージュ）の開始までにすること、授業の内容、普段の生活と余暇の過ごし方について報告したい。

1. スタージュの開始まで

研修生としての採用が 4 月頃に決定すると、フランス大使館文化部を通じてキャンパス・フランスと手続きを行うことになる。支給されるのは、パリ到着以降の奨学金、パリからブザンソンまでの往復の TGV チケット、滞在中の宿泊費のバウチャー、それから研修期間中の社会保険である。また、事前に CLA のサイトに登録して、後述するモジュールの選択を行う必要がある。

報告者は個人的な事情で、スタージュ開始よりも随分前にフランスに到着した。フランス到着後は、まずパスポートの入国スタンプをキャンパス・フランス宛に送る。奨学金は 8 月 1 日以降、国際送金サービス Western Union を経由して現金で受け取るようになっており、通常なら渡仏直後に CDG 空港内店舗での受け取りが推奨されているが、同様の事情でパリ市内の店舗を探した。WU と提携するのは主に個人商店なので、一軒目では「午前中はお金が足りないので午後に来て」と断られ、二軒目をしばらく探し歩いてようやく受領することができた。パリ市内で探す場合は多少余裕をもった方がよいと思われる。

8 月 3 日、パリのリヨン駅を出発して、中継地のブザンソン・フランシュ=コンテ TGV 駅で他の日本人研修生と合流。そのまま別便に乗ってブザンソン・ヴィオット駅に到着した。移動時間は延べ 3 時間ほど。滞在先のホテル Zenitude に荷物を預けると、そのまま勢いで街の散策やヴィクトル・ユゴーの生家訪問などを済ませ、日曜も 19 時まで営業しているモノプリで買い物も行った（ホテル Zenitude の近くにはスーパーがないので、歩いて 10 分強の距離があるこのモノプリを頻繁に活用した）。後述のようにスタージュのスケジュールはかなり密で、美術館などを観光する時間があまり取れなかったので、初日にある程度回ることができたのはよかったと思う。

2. ブザンソンでの授業

翌 4 日の朝 8 時 30 分からスタージュは開始した。3 つのモジュール Module からなる「コース Parcours」（10h×3）、事前登録時に選択可能な「自由モジュール Module libre」（10h）、そして多様なテーマについて議論する「フォーラム Forum」（10h）の三種類から構成されている。コースは本来なら複数の選択肢があるようだったが、今年は総受講生が 26 人と例年より少なかったらしく、Enrichir ses pratiques de classe というコースのみ開講された。報告者はもともとこのコースを希望していたので問題なかったが、別のコース（Innover avec le numérique など）への参加を希望していた受講生からは最初残念がる声も聞こえた。

	Lundi 04/08	Mardi 05/08	Mercredi 06/08	Jeudi 07/08	Vendredi 08/08
8h30 – 10h	Module 1 Dynamiser les pratiques de l'écrit Francine Beissel	Module 1 Dynamiser les pratiques de l'écrit Francine Beissel	Module 1 Dynamiser les pratiques de l'écrit Francine Beissel	Module 1 Dynamiser les pratiques de l'écrit Francine Beissel	Module 1 Dynamiser les pratiques de l'écrit Francine Beissel
10h – 10h30	Pause				
10h30 – 12h	Module 2 Introduire des activités ludiques en classe Francine Beissel	Module 2 Introduire des activités ludiques en classe Francine Beissel	Module 2 Introduire des activités ludiques en classe Francine Beissel	Module 2 Introduire des activités ludiques en classe Francine Beissel	Module 2 Introduire des activités ludiques en classe Francine Beissel
12h – 13h30	Pause déjeuner				
13h30 – 15h	Module 3 Enseigner avec le théâtre, le mouvement et la gestualité Marjorie Heinrich	Module 3 Enseigner avec le théâtre, le mouvement et la gestualité Marjorie Heinrich	Module 3 Enseigner avec le théâtre, le mouvement et la gestualité Marjorie Heinrich	Module 3 Enseigner avec le théâtre, le mouvement et la gestualité Marjorie Heinrich	Module 3 Enseigner avec le théâtre, le mouvement et la gestualité Marjorie Heinrich
15h15 – 17h15	Forums				

表 1 週目の時間割

このコース（Enrichir ses pratiques de classe）には以下のモジュールが含まれる。
Module 1 : Dynamiser les pratiques de l'écrit（講師：Francine Beissel）
Module 2 : Introduire des activités ludiques en classe（講師：Francine Beissel）
Module 3 : Enseigner avec le théâtre, le mouvement et la gestualité（講師：Marjorie Heinrich）

2 週目には「自由モジュール」（Module L）も加わった。事前登録時には最大 10 個選択肢が存在したが、こちらも人数の都合で、最終的に開講されたのは以下の 2 つである。

Motiver les ados（講師：Marjorie Heinrich）
Enseigner la grammaire autrement（講師：Stéphanie Gibausset）

報告者は後者の Enseigner la grammaire autrement を選択した。

1 日の予定としては、まず 1 コマ 90 分のモジュールを 3 つ受講して、そのあと 120 分のフォーラムが続く。このフォーラムも、例年の報告書には 5 個選択すれば良いと書かれていたが、今年は 8 個中 7 個以上選択することが必要と伝えられた。せっかくの機会なので 8 個すべてのフォーラムに参加したが、修了書には 5 個までしか記入されなかったので、7 個必要というのは参加者を安定して確保するための方便だったかもしれない。

以上、2 週間で全 50 時間の講習になる。平日は 8 時 30 分から 17 時 15 分まで、もちろん昼食や休憩の時間は除くが、みっちり研修を受ける。非常に濃密な時間であった。今年は祝日（8 月 15 日の聖母被昇天）が授業期間中に含まれなかったこともあり、休みの日はなし、という事情もあった。

次に、各モジュールの内容について簡潔に紹介しておきたい。（フォーラムについては紙幅の都合から省略する）

Module 1 : Dynamiser les pratiques de l'écrit（講師：Francine Beissel）

この Module1 と次の Module2 は、同じ Francine Beissel さんが担当だが、タイトルと内容が逆になっていた気がする。こちらのモジュールは「書く練習を活発化する」と題されているが、どちらかと言うと書く練習は少なく、むしろ授業内に遊戯的活動を導入するものであったからだ。たとえば自己紹介や他己紹介のユニークな進め方、シチュエーション劇や単語連想ゲーム、それにディスカッションや何らか（環境保護など）の社会的主張

を練り上げるなど、やや高等な活動まで、さまざまな試みが紹介され、受講生が実際に行う。

これは理論的な学習というより、さまざまな実践を、学生の目線で実際に体験してみる、という趣旨だと理解した。普段私たちは教師の立場にあるが、実際に学生としてアクティビティを行う機会は（はるか昔の学生時代の記憶を除いて）少ないはずだ。クラスメイトの前で話すときの心理的抵抗や、待機時間に自分が話す内容をどれだけ練れるかなど、自分でやってみなければわからないことは多い。そうしたことを、他の受講者たちとの会話などを通じて、講師から教えられるのではなく自力で発見していき、自身の授業にフィードバックしていくことができれば、これは有効な取り組みになるものと思われる。

Module 2 : Introduire des activités ludiques en classe (講師 : Francine Beissel)

こちらではむしろ書く活動を活発化させるためのヒントが提供されていた。たとえば写真を見てそこに秘められた物語を想像する、頭文字がアルファベ順になるように単語を並べて文を作る、架空の仕事を創造する、虚構の辞書の項目を作る、三面記事を作る、架空のレシピを作る、など、さまざまなアクティビティを実践した。

講師の Francine Beisselさんは文学における遊戯性にも通じており、ペレック風にEを抜いた文を作る、同じくペレックの「死ぬまでにしたい25のこと」を模倣する、ジャン・コクトー、モーリス・カレーム、マルグリット・デュラス風の詩（詩的散文）を作る、あるいは小説の裏表紙に書かれるあらすじを実際の作者名とタイトルから想像して作ってみるなど、さまざまなアイデアを提示してくれた。文学作品の授業内での活用に関心のある報告者としては、非常に興味深いものであった。一般に「文学」というと、「読む」対象として報告者などはまずイメージしてしまうのであるが、この授業で導入された「書く」対象としての文学や、あるいは次に紹介する演劇的な身振りは、文学テキストや創作物の活用の仕方を拡張してくれた。

Module 3 : Enseigner avec le théâtre, le mouvement et la gestualité (講師 : Marjorie Heinrich)

演劇や身振り、運動を授業内に導入する方法を紹介する講座。座っている時間は少なく、最初からアイスブレイクのための時間を設け、着席しても円座を組むような形で座るか、受講生の発表を聴くときにも観客としてあとで意見や質問を伝えるような、能動的な姿勢が求められていた。講師の Marjorie Heinrichさんはパワフルな女性で、五階の暑い教室を裸足で練り歩いていた。

数回のイントロダクションのあとは各受講生の発表回になり、身振りや運動をとともなう仕方で特定の文法事項を教えることになった。どの発表も、必要な学習目標、語学レベル、所要時間、想定される参加人数などを見極めて行うことが奨励されており、単純なようで熟慮が要求された。報告者はイラン出身の受講生とグループを組み、くじを作成して、生徒役の参加者に、出てきた単語（食事や職業などテーマは絞られている）をマイムまたはその単語以外の言葉を使って表現してもらうという、ボキャブラリーの復習に関する発表を行なった。他の受講者の発表では歌や図像、ポストカードを使った思い思いのアクティビティを導入していて、それらに生徒役で積極的に参加していくのも有意義なことだった。

Module L : Enseigner la grammaire autrement (講師 : Stéphanie Gibausset)

いわゆる伝統的な文法教授法以外に、どんな教授法が存在するのかを検討していく講座。3月の東京でのスタージュと重なる知識面での解説があり（帰納的／演繹的、規範的／記述的といった区別）、反復学習にもなった。講師の Stéphanie Gibaussetさんは気

さくな方で、PPT を中心とした授業資料の共有や、授業内の受講生の質問に答える時間をゆっくり設けており、受講生の反応も良い様子だった（というのも、やはり受講生の側には体系的な知識の伝達を求める欲求や、せっかく講座を受けるのだからそのメソッドを正確に記録して持ち帰りたいという願望が強くあったようだ）。

実際の資料（documents authentiques）や、CLA で開発されたものも含むゲームの使い方など、この授業でも受講生が教員でありつつ学生の立場になって体験していくものが多く、非常に有益に感じた。特にゲームについては、実際に日本の大学のフランス語授業で使うには時間のやりくりが難しいかもしれないが、いつか使えたら面白いだろうなと思い、市内のゲーム店に赴いて Conjudingo（CE1 レベルで遊ぶ活用のゲームセット）などを購入してみた。

3. 普段の生活と余暇について

普段の生活はホテル Zenitude を拠点として行われる。2,3 分歩けば CLA に到着する好ロケーションで、料理道具つきキッチンがあるので自炊も可能。報告者は外食の機会が多かったが、スーパーで買い物すれば大体のことは用意できるはずだ。他に冷蔵庫、電子レンジ、ドライヤーなども揃っている。清掃は週に一度といった感じだが、トイレトペーパーが切れてもフロントに頼めば代わりを提供してくれる。地階にウォーターサーバーもあるので、水分補給はこまめに行いたい。

基本は CLA で授業を受ける生活だが、合間を縫うようにして、平日にも複数の文化活動が催された。たとえば初日には市街をぐるりと囲むドゥー川を観覧船でめぐる 1 時間程度のクルージング。3 日目には休み時間にパンケーキが振る舞われるパーティ。4 日目にはカラオケ大会（Soirée Karaoké）など、他の参加者（同じスタージュの受講生だけでなく、夏季プログラムに参加している大学生なども多数いる）との交流が可能なように CLA 側が主催するプログラムが存在した。参加は自由だが、別の日本人受講者の思わぬ美声に出会うチャンスがあるかもしれない。

土日にも、近隣都市への小旅行の機会が提供されている。今回は土曜日がローザンヌ（スイス）、日曜日がオー・ドゥー Haut Doubs で、いずれも有料。人気があり、人数制限もあるので、早めに応募した方がよい。ただ、休みを貴重な体力回復の機会と考えたり、個人的な旅行をしたい人もいると思うので、無理は禁物だと思う。

報告者は両日ともに参加したが、行き帰りのバス移動の時間や現地での散策の時間も含め、日本人受講者だけでなく他国からの受講者とも交流を深めるよい機会になった。なお、ローザンヌには有料の公衆向け海岸があり、帰りの集合の直前に入場したので滞在したのはほんの数分だけだったが、「泳ぐ」という何となく想定していた願望を実現することができたので嬉しい。またオー・ドゥーではクルージング、要塞探訪、チーズフォンデュの賞味などが楽しめる。

2 日目には Francine の提案で近場のガール・ドー公園（Parc de la Gare-d'Eau）でピクニックを行った。各自が食べ物・飲み物を持ち寄り、しばらく歓談をするというスタイルで、各人連日の講座と散策を経て心地よく疲労しながら、チェコ出身の女性がギター奏者となって、歌ったり踊ったり。それから日が暮れても残った参加者は、すぐ付近のガンゲットというレストランに併設されていた DJ ブースに立ち寄り、気が済むまで踊り明かしていた。スタージュ期間中のスターは満場一致でアンゴラ出身の青年だったと思うのだが、その彼の華麗な踊りを堪能する素晴らしい時間でもあったことを言い添えておきたい。

4. おわりに

こういった次第で、平日の授業も休日の交流も、充実した滞在経験になった。何より、ブザンソンという土地自体が尽きせぬ魅力を有していたと思う。バカンス向きの小都市で、川沿いには犬の散歩をする人や寝そべて無為の時間を過ごす人がいつもおり、夜中には食事やバーに行く人びとの活気がいつもあふれ、全体に夏を楽しもうという穏やかな空気が流れていた。気温は高く、日焼けのしやすい気候ではあったけれども、2週間という比較的長い受講期間に、モチベーションを緩ませることなく研修に打ち込むことができたのは、街自体の魅力によるところが大きい。

また、講師と受講者のあいだの距離が近く、和気藹々とした雰囲気の中で授業を進められたのも、素晴らしい経験のひとつだった。講師からは、本来なら同じ同僚なのだからとtuを用いて呼び合うことを最初から提案され、受講生の側も自国でのフランス語教師としての経験や事情について積極的に共有していった。自分がそういう積極性を発揮できたかは怪しいが、それでも刺激的な交流になった。

授業や受講生との交流を通じて、報告者のフランス語教育に対する考え方はかなり変わったと思う。トルコやイラン、アンゴラ、それにパレスチナやチェコ、スリランカなど、世界各国から参加した彼らは、日本と同様、フランス語圏（フランコフォニー）を構成しているわけではなく、しかもほとんどが中学や高校でフランス語を教えている。したがってゲームや歌を取り入れたフランス語学習に対する関心は、主に大学でフランス語を教えている日本のフランス語講師よりも平均的に高いものと思われた。

授業の一環として、お互いを知るため、それぞれのお国柄などを紹介する機会などが訪れる。そうすると、出身国が他国との戦争状態にあったり、国内でも圧政や腐敗が横行する状況について話題になることがある。もちろん個人的な会話のなかで聴く機会も多かった。そうしたさまざまな社会状況（日本も含め）に置かれるなかで、フランス語を学ぶということの意義がどのように変わってくるのか、わからない。けれども、フランスに来るのは初めてだというアンゴラ出身の青年が、自分が教える子供たちのために動画を撮影していて、報告者も少し映った気がするのだが、そのとき彼がフランス語を学ぶ意義を説明するために、「彼は日本人だ、彼女はパレスチナ人だ、でもぼくたちはフランス語で喋ってる、これが言葉の力、フランス語の力なんだよ」と力説していたときの肯定の快さのようなものは、日本にまで持って帰りたいと思った。

こうした素晴らしい機会をいただけたことに対し、日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、在日フランス大使館の関係各位、とりわけスタージュ運営委員会の皆様と大使館文化部の萩尾英理子様、そして講師の皆様、研修を共にした3人の愉快的仲間たちと各国の研修生たちに、心からお礼を申し上げる。



期間中は天候にも恵まれた

CR du stage d'été à Besançon

(4–15 août 2025, CLA – Université de Franche-Comté)

Hiroaki SEKI

Du 4 au 14 août 2025, j'ai participé au stage d'été de FLE au CLA de Besançon. Le programme comportait 50 heures de formation réparties sur deux semaines, comprenant trois modules principaux, un module libre au choix et une série de forums thématiques.

Le parcours principal proposé cette année s'intitulait « Enrichir ses pratiques de classe » et réunissait l'ensemble des stagiaires (26 participants venant de divers pays). Trois modules de 10 heures chacun étaient au programme :

- 1 : Dynamiser les pratiques de l'écrit (Francine Beissel)
- 2 : Introduire des activités ludiques en classe (Francine Beissel)
- 3 : Enseigner avec le théâtre, le mouvement et la gestualité (Marjorie Heinrich)

En deuxième semaine s'ajoutait un module libre (10h). J'ai suivi « Enseigner la grammaire autrement » (Stéphanie Gibausset). Enfin, les forums thématiques (10h au total) permettaient d'échanger sur des sujets variés liés à l'enseignement du FLE.

Les deux premiers modules proposaient une réflexion pratique sur l'intégration de jeux, d'activités créatives et de pratiques d'écriture originales en classe. Le troisième explorait l'usage du théâtre, du mouvement et de la gestualité pour dynamiser la classe. Enfin, le module libre visait à dépasser l'enseignement grammatical traditionnel en explorant d'autres démarches : inductive/déductive, descriptive/normative. Cette approche montrait comment rendre la grammaire plus vivante et motivante pour les apprenants.

L'approche aussi était résolument ludique : les enseignants redevaient « apprenants » afin de ressentir eux-mêmes les résistances, la motivation et la créativité suscitées par ces activités.

Le stage a été marqué par une grande intensité (cours de 8h30 à 17h15) et par une atmosphère conviviale favorisant l'échange entre enseignants et stagiaires d'origines très diverses (Turquie, Iran, Angola, Palestine, Japon, etc.). Au-delà des apports méthodologiques, cette expérience m'a permis de réfléchir au rôle du français comme langue de communication interculturelle et de renouveler ma conception de l'enseignement du FLE.

Je tiens à exprimer ma profonde gratitude à la Société Japonaise de Langue et Littérature Françaises, à la Société Japonaise de Didactique du Français, ainsi qu'à l'Ambassade de France au Japon, et plus particulièrement à Mme Eriko Hagio et aux membres du comité du stage, sans oublier les formateurs, formatrices et tous les camarades stagiaires venus de différents pays, qui ont rendu cette formation possible.

フランシュ＝コンテ大学付属応用言語センター夏季スタージュ報告書

平澤 暢之

本報告書は、2025 年 8 月 4 日から 14 日にかけて、ブザンソンのフランシュ＝コンテ大学付属応用言語センター（Centre de linguistique appliquée、以下 CLA）で開催された夏季スタージュ（Université pédagogique d'été）への参加記録である。

I. 渡航前の事前準備について

渡航前の準備として、まずはフランス大使館から送付されたエクセルファイルに希望日程を記入し、パスポートのスキャンデータを提出した。その後、給費申請手続き用の「Formulaire Bourse Stage」が送付されてきたので、記入のうえ大使館へ返送した。

この申請が受理されると、仏政府給費研修生として、パリ＝ブザンソン間の往復航空券と 15 日間の宿泊費が支給され、さらに現地で奨学金を受け取ることができる。ただし、空港内に設置されている奨学金受け取り窓口はやや分かりづらい場所にあるため、注意が必要である。

フランス大使館文化部の萩尾英理子さんのご尽力により、非常にスムーズに事前準備を進めることができた。この場を借りて深く感謝申し上げたい。

II. 全体のプログラムについて

受講者は、前述の手続きに加えて、CLA のウェブサイト (<https://cla.univ-fcomte.fr/>) から、事前に夏季スタージュ（Université pédagogique d'été）への参加登録を行う必要がある。その際、以下の 5 つのコースから 1 つを選択することになっている。

Parcours 1 : « Entrer dans l'enseignement du FLE »

Parcours 2 : « Enrichir ses pratiques de classe »

Parcours 3 : « Enseigner aux enfants »

Parcours 4 : « Enseigner dans les filières bilingues »

Parcours 5 : « Innover avec le numérique »

各コースは、必須モジュール 3 つ（合計 30 時間）、自由選択モジュール 1 つ（10 時間）、さらに自由選択フォーラムから構成されており、修了には合計 50 時間の受講が求められる。筆者が選択した Parcours 2 « Enrichir ses pratiques de classe » の基本構成は以下のとおりである。

Module 1 : Dynamiser les pratiques de l'écrit

Module 2 : Introduire des activités ludiques et créatives en classe

Module 3 : Enseigner avec le théâtre, le mouvement et la gestualité

+ 自由選択モジュール×1

+ 自由選択フォーラム×5

自由選択モジュールについては、登録後に CLA から連絡があり、

1. « Motiver les adolescents »
2. « Enseigner la grammaire autrement »

のいずれかを選択するよう求められた。筆者は初年次の文法授業を担当しているため、後者を選択した。

フォーラムについては、スタージュ開始時に 6つの候補が提示され、その中から 5つ以上を選択して受講するよう指示された。筆者が最終的に受講したフォーラムは以下のとおりである。

1. « Médiathèque »
2. « Une voix venue de Chine »
3. « Le français des traducteurs automatiques et le français des gens »
4. « Chansons françaises et francophones »
5. « La remédiation phonétique avec la méthode verbo-tonale »

なお、希望すれば 6つすべてのフォーラムを受講することも可能である。

本年度のすべてのモジュールおよびフォーラムは、右の写真にある CLA 施設内（6 rue Gabriel Plançon）で実施された。

III. モジュールについて

以下では、筆者が受講した各モジュール（必須モジュール×3 と自由選択モジュール×1）について、その概略を記す。

Module 1. « Dynamiser les pratiques de l'écrit »

担当講師：Francine Beissel

本モジュールでは、講師が « écriture créative » のさまざまな実践例を紹介し、受講者が学習者の立場でアクティビティに参加するという形式で進められた。紹介されたアクティビティの一部を挙げると、以下の通り。

1. 各グループで実在の動物・国・都市を一つ取り上げ、荒唐無稽な辞典記事を書く « Encyclopédie absurde »



(写真：CLA 施設 撮影：平澤)

2. ジョルジュ・ペレックのインタビューに倣い、「死ぬまでにやりたいこと」をリスト化する « 25 choses à faire avant de mourir »
3. 実在の詩作品の抜粋をもとに、その構造を借りてオリジナルの展開を執筆する « la structure inductrice »
4. 写真の人物や果物・野菜になりきって、自分の身の上を語る « Écrire à la manière de... »
5. ペレック『煙滅』にならい、特定のアルファベットを使わずに文章を書く « le lipogramme »

グループワーク、ペアワーク、個人作業を織り交ぜながら、多様なアクティビティに取り組むメリハリのある授業構成であり、一受講者として大いに楽しむことができた。創意工夫を凝らし、ときに苦心しながらも、外国語でオリジナリティのある文章を書く喜びを味わえるという点が、このモジュールの醍醐味である。内容は初学者にはやや難しい印象を受けたが、どれも興味深く、自身の授業にも工夫して取り入れていきたいと感じた。

Module 2. « Introduire des activités ludiques et créatives en classe » 担当講師：Francine Beissel

本モジュールでは、その名の通り、「創造的」で、「遊び」の要素を取り入れたアクティビティがふんだんに紹介された。受講者は、生徒の立場でアクティビティに参加しながら、ともすれば単調な暗記学習や反復練習に陥りがちな語学のクラスに、いかに「遊び」の要素を導入するかを学ぶことができた。

紹介されたアクティビティは、クラス全体に向けてペアになった相手のことを紹介するアクティビティや、各グループに配られた写真（Paul Almásy の作品）について、写真自体を見せることなく、言葉だけを用いて内容を伝えるアクティビティ、各グループで未来の発明品を考案してプレゼンするものなど、多岐にわたった。

いずれも机や筆記具は極力使わず、クラス全体が輪になって参加する形式になっていたほか、ダイスやボール、カードといったアイテムを使ったり、積極的に身体を動かしたりするなど、授業にダイナミズムをもたらし、クラス全体の積極的な参加を引き出す工夫がふんだんに施されていた。また、それぞれのアクティビティが紹介される際に、目安として、想定される学習者のレベルや、目標とされている言語能力、応用法などが明示されていた点も、非常に実用的であった。

「遊び」の要素を取り入れたアクティビティは、一方向授業や単調なグループワークに陥ることを避け、学習者が飽きることなく、積極的に授業に参加することを可能にする。今回、学習者の立場で実際にアクティビティに参加したことで、身をもってその効果を実感することができた。自分のクラスでもぜひ応用してみたい。

Module 3. « Enseigner avec le théâtre, le mouvement et la gestualité » 担当講師：Marjorie Heinrich

本モジュールでは、俳優・演出家としての経験を持つ講師の指導のもと、フランス語教育に演劇的要素（運動・身振り・表情など）を取り入れる方法を実践的に学んだ。

大教室の空間を使い、歩き回りながら発声したり、パントマイムを行ったりと、通常の授業では行わないようなアクティビティが多数提案され、受講者は学習者の立場でこれらに参加した。これらのアクティビティは、身体をほぐし、外国語を話す心理的障壁を取り除くとともに、言語表現と身体表現を有機的に結びつけることを目的としていた。

後半には、演劇的要素を取り入れたアクティビティをペアで考案、クラスの前で実演して、フィードバックを得る実習が行われた。多国籍・多文化の参加者による多彩なアイデアに触れることができ、フランス語教育に携わる者として非常に刺激的であった。

Module libre : « Enseigner la grammaire autrement » 担当講師 : Stéphanie Gibausset

本モジュールでは、従来型の「規則を明示し、練習問題で定着させる」文法教授法とは異なるアプローチが多数紹介された。

初回は、規範文法／記述文法、「grammaire inductive / déductive」といった基本概念を確認した後、配布資料をもとに「どの教授法に基づくか」「教材単元のどの段階で用いるか」といった点について活発なディスカッションが行われた。また「grammaire inductive」がどのように機能するのかを学習者の立場で体験するために、未知の言語で書かれたテキストを使い、品詞や意味を推測する演習が行われた。文法も語彙も全く知らない未知の言語で書かれた文章であるにもかかわらず、手を動かしていると、いつの間にか構文や意味が把握できるようになっていくという経験は衝撃的であった。

後半では、文法教育における document authentique の活用法について議論が行われたほか、文法教授用に考案されたテーブルゲームやウェブアプリの紹介があり、グループごとに新しいゲームを発案する活動も行われた。理論と実践のバランスが取れた、充実した内容のモジュールであった。

IV. フォーラムについて

以下では、筆者が受講したフォーラムの概要を記す。

1. « Médiathèque »

CLA 付属の図書館・視聴覚資料室のウェブサイトやアカウントの利用方法、FLE 教育に関わる各種リソースについて紹介があった。また、配架棚や蔵書の案内も行われた。

2. « Une voix venue de Chine »

中国の現代詩人でありフランス詩の翻訳家でもある樹才（1965-）を招き、仏訳版の翻訳者・編集者とともに鼎談が行われた。ルネ・シャールやピエール・ルヴェルディなどフランス現代詩との関係、翻訳の課題、現代中国の出版事情などについて活発な議論が展開され、樹才自身による原詩とその仏訳の朗読も披露された。

3. « Le français des traducteurs automatiques et le français des gens »

機械翻訳と生きたフランス語の違いをテーマとする講義。担当講師 Régine Llorca のユーモアあふれる語り口と豊富な実例を通じて、機械音声の平板な発音では失われてしまう抑揚が、フランス語の口頭コミュニケーションにおいていかに重要な役割を果たすかが説得力をもって示された。

4. « Chansons françaises et francophones »

Francine Beissel 講師による、フランス語圏の最新音楽紹介。日本ではまだあまり知られていない多くの歌手の作品を知ることができ、大変興味深い内容であった。個人的には、特に Juliette による « Les corons » を聴けたことが収穫であった。

5. « La remédiation phonétique avec la méthode verbo-tonale »

発音矯正に関するフォーラム。とりわけプロソディの改善方法が取り上げられ、具体的な実践例を通して学ぶことができた。一学習者としても、非常に有益な内容であった。

V. ブザンソン滞在および課外活動について

1. ブザンソンについて

スタージュの開催地であるブザンソンは、丘の上に築かれたフランシュ＝コンテ地方の歴史ある城砦都市である。周囲を険しい山々に囲まれ、古来より交通の要衝であったブザンソンには、マルクス・アウレリウス時代に遡る «Porte Noire» をはじめ、ルイ 14 世の時代にヴォーバンが築いた城砦や、ナポレオン期の砲兵学校など、数多くの軍事的建造物が残る。

スタージュ期間中は思いの外多忙で、観光の余裕は限られていたが、幸いにも、ドゥー河に囲まれた街並みを歩くだけで、風光明媚な景観を楽しむことができた。



(ドゥー河のほとり 撮影：平澤)



また、ブザンソンは 19 世紀を代表する詩人ヴィクトル・ユゴー（1802-1885）の生誕地として知られる。現在、その生家は、数多くの社会問題に取り組んだこの大詩人の文筆活動を紹介する展示室として公開されている。

さらに、ピエール・ジョゼフ・ブルードン（1809-1865）の生家や、スタンダール『赤と黒』（1830）の舞台の一つである「大神学校」など、ブザンソンには、文学史・思想史にゆかりのある建造物も少なくない。

市内にはブザンソン美術館や自然史博物館など文化施設が充実しており、近郊オルナンにはクールベ美術館もある。時間に余裕があれば、訪問を強く勧めたい。

« L'Apothéose de Victor Hugo »

（Place Granvelle にはユゴーの生誕 100 周年を記念する彫像があった。 撮影：平澤）

2. 課外活動について

2 週間にわたる CLA 夏季スタージュ期間中、大学主催でいくつかの文化活動（Activités culturelles）が実施された。以下にその概要を記す。

1). 遊覧船でブザンソン巡り

ブザンソンの中心街を取り囲むドゥー河（Doubs）の流域を遊覧船で巡った。心地のよい風に吹かれながら、第二帝政時代にまで遡るという水門や、ヴォーバンの手になるブザンソン城塞、歴史ある河岸の街並みを眺めて、束の間ゆったりとした時間を過ごすことができた。

2). ペタンク

CLA の夏季講座に参加していた学生とともにペタンクを体験。ルールは知っていたものの実際にプレーするのは初めてで、貴重な経験となった。

3). カラオケ

多国籍の学生が集まり、フランス語・英語に加え、中国語、イタリア語、スペイン語など多言語の歌が披露された。特に日本のアニメソングやポップスの人気には驚かされた。米津玄師の「Lemon」を歌いこなす外国人学生もいたほどである。筆者自身は、ビートルズの « Yesterday » と、研修生の関さんとともに井上陽水「夢の中へ」を歌った。

4). Lausanne 小旅行（有料）

スイスの Lausanne を訪問。ローザンヌ大聖堂、オリンピック博物館、湖畔のビーチを巡った。オリンピック博物館では、歴代の聖火トーチやメダル、衣装が展示され、近代オリンピックの歴史を学ぶことができた。大聖堂は美しいステンドグラスで有名であり、鐘楼に登れば街を一望できる（ただし足場は悪く、高所恐怖症の人には注意が必要）。

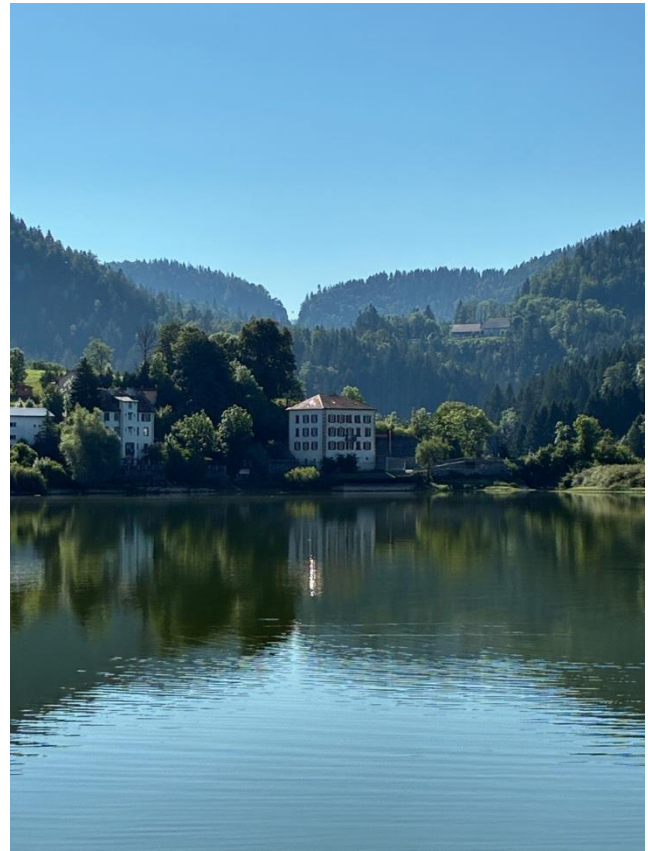
5). Haut-Doubs 旅行（有料）

ジュラ山脈に位置するHaut-Doubs 地域を訪問。まずVillers-le-Lac から遊覧船に乗り、峡谷沿いに進んで、名高い Le Saut du Doubs を見学した。

切り立った岩肌や屹立する大木、大瀑布の迫力は圧巻であった。国境に位置するため、左右の岸でフランスとスイスに分かれている点も印象的であった。

昼食では、コンテ・チーズやジュラ地方のワイン、名産のシャルキュトリーを用いたチーズ・フォンデュを堪能した。

最後に 古城 Fort de Joux を訪問。中世にまで遡るこの要塞の歴史を学んだ。ここには革命家ミラボーが幽閉された塔や、ハイチ革命の指導者トゥーサン・ルーヴェルチュールが収監された独房が残されており、フランス史を知る上でも、大変興味深い見学となった。



（Villers-le-Lac 遊覧船上の眺め 撮影：平澤）

結び

今回の研修に参加して何より得難い経験であったのは、充実したカリキュラムはもちろんのこと、それを支える事務の方々や熱意ある講師陣、そして世界各国からやってきた多くの研修生の方々との交流であった。フランス語を通じて、これまで会ったことのない人々とかげがえのない時間を共にし、時に意見をぶつけ合いながらも、心を通わせるという経験を通じて、フランス語を学ぶ意義をあらためて認識したように思う。この経験を糧としつつ、今後はフランス語を学ぶ楽しみを、ぜひ多くの学生へと伝えていけるように尽力したい。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、在日フランス大使館関係者の皆様にあらためて心より御礼申し上げます。そして研修期間、苦楽を共にした3人の日本人研修生に感謝の言葉をおくりたい。

Rapport sur l'Université pédagogique d'été en 2025 au Centre de linguistique appliquée de Besançon

Nobuyuki HIRASAWA

L'Université pédagogique d'été 2025 s'est tenue du 4 au 14 août à Besançon, au Centre de linguistique appliquée (CLA) de l'Université de Franche-Comté. Les participants étaient invités à choisir l'un des parcours proposés, chacun composé de trois modules obligatoires (30 h) et d'un module au choix (10 h). La participation aux forums de fin de journée était également requise, afin de valider un total de 50 h de formation.

Le parcours suivi portait le titre « Enrichir ses pratiques de classe ». Comme son nom l'indique, il visait à améliorer les pratiques pédagogiques et comprenait trois modules obligatoires :

1. Dynamiser les pratiques de l'écrit
2. Introduire des activités ludiques et créatives en classe
3. Enseigner avec le théâtre, le mouvement et la gestualité

Ces modules portaient respectivement sur l'écriture créative, les activités ludiques et l'approche corporelle de la langue. De nombreuses activités de classe ont été expérimentées, dans lesquelles les participants ont adopté le rôle des apprenants. Cette démarche a permis d'évaluer le fonctionnement de ces activités – leur efficacité et leurs difficultés – du point de vue des apprenants.

En complément de ces trois modules, l'option choisie était « Enseigner la grammaire autrement ». Ce module proposait une approche didactique renouvelée, mettant l'accent sur les compétences des apprenants, notamment leur capacité à observer les phénomènes linguistiques et à comprendre de manière intuitive le fonctionnement régulier de la langue cible. L'analyse de manuels de FLE, réalisée à l'aide d'un outil conceptuel, a été complétée par un travail sur l'exploitation de documents authentiques et de jeux didactiques appliqués à l'enseignement de la grammaire.

L'accueil attentif de l'équipe administrative et l'implication des enseignants ont largement contribué à la qualité et à la richesse de cette formation. Les modules suivis et les forums organisés nous ont offert une expérience académique et humaine particulièrement stimulante. Le séjour à Besançon, ville historique et mémorable, a constitué un cadre idéal pour ce programme.

À titre personnel, je souhaite exprimer ma profonde gratitude à toutes les personnes qui ont contribué à l'organisation de ce stage et ont rendu possible ma participation au programme d'été du CLA.

2025 年ブザンソン CLA 夏季スタージュ報告

山田美樹

2025 年 6 月 30 日から 7 月 9 日まで、フランス、ブザンソンのマリー&ルイ・パスツール大学附属語学学校の応用言語学センター（CLA）で行われたフランス語教員研修に参加した。本報告書では、研修参加までの経緯、現地で受講した授業の概要および研修を通じて得た考察を報告する。

1. 研修参加の経緯・事前手続き等

報告者は大学院博士後期課程でフランス語教育の研究を行うとともに、本年度 4 月より大学で初級フランス語の授業を担当している。実際に教壇に立つ中で、学習者の主体的かつ能動的な参加を促す授業の重要性を認識するとともに、その実現には実践的知識や技能の深化が不可欠であると考えていた。CLA は創造的な教育実践において国際的に高く評価されていることから、授業改善に資する知見を得るため、本研修への参加を希望した。

研修開始前の手続きは 4 月上旬より在日フランス大使館文化部を通じて行った。研修日程について、当初、7 月下旬（7 月 21 日～8 月 1 日）または 8 月上旬（8 月 4 日～8 月 14 日）のいずれかを選択するよう案内があった。しかし、報告者は 7 月 10 日からブザンソンで開催される国際フランス語教授連合（FIPF）世界大会への参加を予定していたため、研修期間を 6 月 30 日～7 月 9 日に変更していただいた。CLA との連絡、滞在先や TGV チケットの手配などは大使館が対応くださったため、報告者は Dossier de bourse de stage の提出、CLA サイト上での参加登録、受講する授業の選択を行なった。その後、6 月中旬に滞在先の情報や TGV チケット、奨学金の受け取りに関する案内を受け、現地へと出発した。

2. 奨学金の受領・宿泊先

奨学金は、シャルル・ド・ゴール空港内 TGV 乗り場付近の Western Union にて受領した。事前に大使館から詳細な案内をいただいていたため、奨学金受領に関して問題はなかった。ブザンソンでの滞在先は ZENITUDE LA CITY であり、CLA から徒歩数分、街の中心部からも徒歩 10 分ほどの距離に位置する利便性が高い場所だった。ホテルにはキッチンや調理器具、冷蔵庫、ドライヤー、扇風機など生活に必要な設備が一通り備えられており、滞在環境はきわめて良好であった。

3. 研修概要

授業は、Parcours（必修 3 科目・各 10 時間）と Module 1・2（自由選択科目：各 10 時間）からなる計 50 時間で構成されていた。報告者は、Parcours には「Enrichir ses pratiques de classe」を、Module には「Enseigner la grammaire autrement」、「Développer la phonétique active」を選択し受講した。

研修には、報告者のほか、トルコ、サウジアラビア、モロッコ出身の若手教員から 15 年以上の経験を持つ教員まで 9 名が集った。Parcours ではこの 9 名全員で授業を受講し、Module では選択科目に応じてクラスが分かれた。授業の合間に、スタジエールたちと各国のフランス語教育の状況や日々の教育実践について意見交換を行えたことも、非常に貴重な経験であった。

4. 授業の内容

報告者が受講した授業では、主に身体表現を取り入れた教育活動について学んだ。授業は全てワークショップ形式で実施されたため、実際に学習者の立場になり様々な活動を体験することができた。以下では、受講した授業の中から印象的だったものを取り上げる。

Enseigner avec le théâtre, le mouvement et la gestualité (Mme Vanessa PARISOT)

この授業では、ジェスチャーや演劇など身体表現を取り入れた活動を学び、その意義を検討した。その一例として、教室の机や椅子を端に寄せて広い空間を確保し、先生の指示（「浜辺を歩く」「泥道を歩く」など）に従ってその動作を再現しながら歩いたり走ったりする活動が行われた。このような身体表現を基盤とする活動は、語彙や表現の習得を促すのはもちろんのこと、学習者の能動的な参加や学習意欲の向上に寄与し得る点においても意義があると感じた。加えて、この授業では詩や小説の抜粋を題材とした演劇活動に取り組んだ。スタジエールは個人または 2~3 人のグループで小道具や BGM を準備し、練習を重ねた上でクラス全体に劇を披露した。演劇では発音や文法の正確さのみならず、感情を込めて言語を用いることが求められるため、学習者の表現力や伝達力の育成に有効な教育活動であると考えられる。一方、この活動では準備から発表に至るまで計 6 時間ほどの時間を要したことから、日本の授業で同様の取り組みを行う際には、時間的制約を踏まえた運営上の工夫が不可欠である。また、日本人学習者には演劇表現に抵抗を示す者も少なくないと考えられるため、学習者の文化や特性に配慮した指導が求められると感じた。

Introduire des activités ludiques et créativité en classe (Mme Francine BEISSEL)

語彙や表現の習得を目的とした「言葉あそび」の要素を取り入れた活動を体験した。例えば、全員で輪になり「旅行」や「秋」といったテーマに関連する語を順番に挙げる活動や、アルファベット順に各文字から始まる野菜の名称を挙げる活動など、初級の学習者に対しても実践可能と思われる活動があった一方で、効果に関して検討の余地が残る活動もあった。その一例として、先生が提示した生物や植物の語彙（例：dinsaure, tulipes, lapin, rose, chat, jasmin, chien）をもとに、スタジエールたちがグループでそれらを組み合わせて新しい語を創り、定義を考えるという活動がある。報告者のグループでは、rose と lapin を組み合わせて「Ropin」という語を作り、「果実の種を取り除く道具」と定義した。この活動は初級者向けとして紹介されたが、語彙知識が十分でない学習者にとって、実際には存在しない語を扱うことは誤った知識の習得につながる恐れがあると考えられる。とはいえ、単調な暗記に陥りがちな語彙学習を遊戯的かつ創造的な営みに転換する具体的な手法を学べた点で、この授業は非常に有意義だった。

Développer la phonétique active (Mme Claire ALSRUHE)

フランス語のリズム、アクセント、イントネーションといったプロソディを、身体表現を通して学習する活動を体験した。具体的には、スタジエール全員で輪になり、手拍子やタンバリンのリズムに合わせてフレーズを発話する、音節ごとに一歩ずつ歩きながら発音する、イントネーションの上昇・下降に応じてボールを投げるといった活動が行われた。身体を動かしながら発声することで、フランス語特有のプロソディを知識としてのみならず感覚としても習得することができる。しかしながら、この種の活動を効果的に実施するためには、当然のことながら、教師自身がプロソディを十分に理解し、学習者の課題を的確に把握して指導する力が不可欠である。このことを踏まえて、授業を担当した Claire 先生は、スタジエールたちが研修終了後も学びを継続できるように、多数の教師用資料を提供して下さった。今後は、こうした資料を活用し、身体表現を取り入れたプロソディ指導について理解を深め、自身の授業で実践することを目指したい。

5. 最後に

CLA の標語 « Apprendre les langues autrement ! » が示す通り、本研修では、従来の枠にとらわれない創意工夫に満ちた言語学習の在り方を学ぶことができた。特に印象的だったのは、学会や研究会で盛んに議論される AI をはじめとするテクノロジーを活用した教育活動が、この研修では一切話題に上らなかった点である。授業中はパソコンやスマートフォンなどの電子機器を使用する機会はほとんどなく、その代わりに自分自身で思考し、身体を動かし、仲間と対話することが重視されていた。実際にこうした活動に参加してみると、学んだ知識そのものに加え、その過程でのやり取りや出来事が鮮明に記憶に刻まれ、楽しさや達成感を伴うことを実感した。AI が急速に発展する時代にあって、あるいはむしろそのような時代であるからこそ、あえて AI を用いず、人間の感性や身体的経験を重視する教育には大きな意義があることを再確認した。

しかしながら、このような教育活動を実際に行うためには、日本の教育環境や学習者の特性を踏まえた慎重な設計と、教師自身の高度な指導力が不可欠である。そのため、今回得た学びを直ちに自身の実践に反映させることは容易ではないが、学習者にとって魅力的な授業づくりを目指して今後より一層研鑽を重ねていきたい。

加えて、本研修を通じて諸外国のフランス語教員と出会えたことも大きな財産である。彼らとは現在も連絡を取り合い、それぞれが担当する授業をオンラインでつないだ交流学习の実施を検討している。こうした良き仲間との出会いは大きな刺激となり、今後の教育活動を支える基盤となるに違いない。

最後に、夏季研修の機会を与えてくださった在日フランス大使館、日本フランス語教育学会、日本フランス語フランス文学会、そして充実した研修を提供してくださった CLA の先生方及びスタッフの皆様に心より感謝申し上げます。

Rapport de stage d'été 2025 au Centre de linguistique appliquée (CLA)

Miki YAMADA

Du 30 juin au 9 juillet 2025, j'ai participé au stage d'été pour enseignants de français organisé par le Centre de linguistique appliquée (CLA) de Besançon, dans le but d'apprendre des méthodes pédagogiques favorisant la participation active des apprenants.

Le programme, d'une durée de 50 heures, comprenait un parcours obligatoire, ainsi que deux modules optionnels. J'ai suivi le parcours « Enrichir ses pratiques de classe », et les modules « Enseigner la grammaire autrement » et « Développer la phonétique active ».

Le stage, organisé en une seule classe de neuf participants, comprenait des enseignants originaires de Turquie, d'Arabie saoudite et du Maroc. Malgré la taille réduite du groupe, la diversité des parcours professionnels était notable, allant de jeunes enseignants à ceux ayant plus de quinze ans d'expérience. Les échanges menés avec les stagiaires portant sur leurs contextes d'enseignement et leurs pratiques, ont constitué une expérience instructive, favorisant la compréhension des variations pédagogiques selon les pays.

Les cours ont été consacrés à l'analyse et à l'expérimentation d'activités pédagogiques, elles-mêmes fondées sur des approches créatives intégrant l'expression corporelle. Les activités comprenaient des jeux théâtraux à partir d'extraits littéraires, des exercices de production lexicale autour de thèmes imposés, ainsi que des activités phonétiques utilisant frappes de mains et tambourins.

Ce qui me semble remarquable, c'est que l'usage de l'IA et des autres technologies dans les activités pédagogiques n'a jamais été abordé au cours de ce stage. Tous les cours se sont déroulés presque sans recours à l'ordinateur ou au smartphone. L'accent était mis, au contraire, sur la réflexion individuelle, l'engagement corporel et l'interaction avec les pairs. En participant de manière effective à ces activités, il est apparu que, au-delà des savoirs acquis, ce sont les échanges et les expériences vécues qui s'impriment avec vivacité dans la mémoire, accompagnés d'un sentiment de plaisir et d'accomplissement. Dans un contexte marqué par le développement rapide de l'IA, la valeur de l'enseignement n'y ayant pas recours a été d'autant plus réaffirmée.

Cependant, la mise en œuvre de telles pratiques pédagogiques requiert une adaptation au contexte éducatif japonais ainsi qu'une expertise pédagogique approfondie. Leur application immédiate n'est donc pas aisée, mais il importe de maintenir un perfectionnement constant afin d'assurer aux apprenants des cours véritablement stimulants.

Je souhaiterais terminer ce rapport en exprimant ma profonde gratitude à l'Ambassade de France au Japon, à la Société japonaise de didactique du français et à la Société japonaise de langue et littérature françaises pour m'avoir offert cette opportunité, ainsi qu'à l'ensemble de l'équipe pédagogique du CLA pour la richesse de sa formation.

2025 年ブザンソン CLA での FLE 教員研修報告

南部

ジュラ山脈の麓、スイスと国境を接する街ブザンソン。ブザンソンはブルゴーニュ＝フランシュコンテ地域圏の中心都市で、ドゥー県の県庁所在地である。人口 11 万ほどのこの街で、8 月 4 日から 8 月 14 日の間、欧州、アフリカ、中東、アジア、南米などおよそ 10 カ国から参加した、フランス語教育に携わる研修生達と共にマリー＆ルイ・パスツール大学（旧フランシュ＝コンテ大学）附属 CLA にて、FLE 夏期研修を受講してきた。今回の研修はいかに学習者の意欲を遊戯的要素や演劇要素を使って刺激し、創造性や学習への積極性といった教育効果を引き出せるか、各研修生や講師の方々と共に考えた貴重な機会であった。

I. 研修概要及び所見

2025 年の履修コースは、受講人数の関係から、最終的に開講されたコースは「Parcours 2 : Enrichir ses pratiques de classe」のみであり、研修生は全員この同じ履修コースを受講した。研修はこの 30 時間の履修コースに加えて、10 時間の自由選択科目と、各研修日の終わりに開催されるフォーラムへの期間中 5 回の出席（10 時間）から構成され、合計 50 時間の研修プログラムとなっている。

« Parcours 2 : Enrichir ses pratiques de classe »

このコースは 3 つのモジュールから構成されている。「Enseigner avec le théâtre, le mouvement et la gestualité」のモジュールでは、身体の動きや発声を伴う演劇要素を FLE の学習に取り入れていくための実践例やテクニックが共有された。行動中心アプローチ（Approches actionnelles）で学習者を *acteurs* という演劇用語を使って定義づけしていることから分かるように、演劇要素を含んだ学習活動は、語彙や文法、発音などをより長期間学習者の記憶の中に定着させやすくする点や、クラス内での傾聴や結束の雰囲気作りという点において効果が高いと感じた。演劇といっても、本格的な台本付きの演技指導を行うのではなく、短時間でも取り入れられるようなアクティビティーの紹介が中心であった。自己紹介、他己紹介、あるいは先生が指示するフランス語のポーズをとったり発声する（例えば：*Haussez les épaules ! Penchez-vous en avant ! Fredonnez !*）など、特に初級から中級の学習者に基本語彙や表現を定着させるための活動を多く紹介していただいた。身体の動きや声出しを伴うことで、あるフランス語の発話や動きに関する感情（例えば：「肩をすくめる（*Hausser les épaules*）」という表現とその動きには無関心や、分からない、どうでもいいといった感情が込められることが多い）も実感しながら印象的に学びを深めてもらうことができる。また、最後にグルー

プでオリジナルの演劇要素を含んだ学習活動を発表する機会があった。私は自身の専門である美術史の分野と関連させて、A1 レベルの学習者を想定した直接法現在・命令形の表現を定着させる口頭表現の活動を考案した。「名画の中の人物になりきってみよう」と名付けたその活動は、学習者が5枚程度の絵画作品から1作品を選び、描かれたシチュエーションや、人物の動き、そしてそれに伴う感情を自由に想像して命令形の台詞を作成し、絵画の中の人物たちと同じポーズをとりながら発表してもらうというものである。作品には、ピーテル・ブリューゲルの「農民の踊り」やウジェーヌ・ドラクロワの「民衆を導く自由の女神」、テオドール・ジェリコーの「メデューズ号の筏」といった、細部が観察しやすく、画面に描かれている場面もドラマチックであったり、鑑賞者の想像力を掻き立てやすい作品を選んだ。実際に活動を行ってみて、A1 レベルの学習者では、命令形に使える動詞の語彙が限られているので、活動を始める前に使えるような動詞とその活用形（命令形）をクラス全体で共有・復習する方がよいのではといった指摘や、美術という文化的な側面からの学びも同時に学習者に提供できて良い、などのフィードバックが聞かれた。また、アダムとイヴの「楽園追放」をテーマにした作品を候補にいていたが、イスラム圏出身の研修生たちから、裸体の人物像は教材としてふさわしくないとの意見もあり、こうした国際色豊かなメンバーが集まる研修ならではの指摘だと感じ、教員が学習者の多様な背景を想像・理解することの重要性も改めて実感した。

次に「Introduire des activités ludiques et créativité en classe」、そして「Dynamiser les pratiques de l'écrit」という2つのモジュールでは、学習者にいかに授業内で自発的にフランス語で発話してもらい、そしていかに創造力を刺激しながら、フランス語で文章を作成してもらうか、という教育目的のための教授法上のテクニックの共有や実践に力点が置かれていた。「Introduire des activités ludiques et créativité en classe」では、学習者の遊び心や創造性を刺激するゲーム的要素のある授業活動が数多く紹介され、研修中に実践した。例えば「*Air, Terre, Mer*」という語彙力強化のためのゲームでは、先生がゲームのタイトルにある3語（Air, Terre, Mer）のいずれか一語をテーマとして宣言しながらボールを隣の学習者にパスし、その学習者はそのテーマに沿った単語（例えば Mer が宣言された場合は：*poisson, sous-marin, pirate, nager* など）を1つ発話し、加えて新たなテーマを宣言しながら隣の学習者へボールをパスする。渡された次の学習者はその宣言されたテーマに関する新たな単語を発話し（例えば Air が宣言された場合、*oiseau, ciel, bleu, avion, voler* など）、また新たにテーマを宣言しながら次の学習者にボールを回していく。ボールまわしやテーマ宣言を含め、リズムよく進行すると、参加者の反射神経も刺激されモチベーションを維持しながらゲームの効果を高めることができる。「〇〇はフランス語で何というのだろうか」という疑問から、ゲームの参加者に新たな語彙を調べて発見させ、それを発話することを促せるし、ゲームで出た語彙や表現をクラス全体で共有することもできる。また、研修内では教育法の紹介に留まったが、学習者が主体的に自らの学習内容に踏み込んで理解をより深めるための、プラス・マイナス・

インタレスティング（PMI）教育法も印象深かった。PMI 教育法によって学習者が学習事項について多角的な視点を持ち、自分の分かりにくかった点を発表、共有することで、学習事項の本質的な理解へと繋がっていく可能性がある。例えば *s'habiller* という再帰動詞を学習した際に、プラス・マイナス・インタレスティングをそれぞれ書き出し、クラス内で共有してもらうなどの場面が想定される（例・プラス：日常会話でよく使うので役立つ。/ 他の再帰動詞の使い方も覚えられる。マイナス：再帰動詞なので活用がややこしい。/間違えて *habiller* だけで使うと意味が変わるので注意が必要。インタレスティング：・日本語にはない「再帰動詞」という考え方が新鮮。）

モジュール« *Dynamiser les pratiques de l'écrit* »では、学習者がある程度の自由裁量をもってフランス語での筆記表現を創作できる学習活動のアイデアを、先生と研修生内で共有し、その実践を行った。例えばあらかじめ与えられた複数の単語をすべて使って短い文章や物語を書くログラリー (Logorallye) や、ベルギーのフランス語圏の児童詩人 Maurice Carême の難解な語彙や表現が少ない比較的平易な詩（主語+動詞+目的語の基本構造で理解しやすいものなど）を文体は変えずに単語を入れ替えて文脈やストーリーを自由に創作させる活動、Georges Perec の小説『煙滅 (*La Disparition*)』にちなんで、母音 *e* を使わずにフランス語で数行の文章を創作する実践例などが紹介された。こうした学習は、フランス語で文章を書くおもしろさを感じてもらいながら、単語と文脈の関係性を理解し、文章構成力と創造力を高められるように感じた。また、各研修日の終わりに様々なテーマで開催された Forum では、特に 2023 年から 2025 年の間にフランスで話題となった曲を紹介しながら、現在のフランスのポップ音楽の傾向を紹介していただいた回や、フランス語ネイティブ話者の幼児、若者、成人向けの教育系雑誌やサイトを Documents authentiques としてどうやって FLE の教材として活用するか考察した回などが印象深かった。

« Module libre : Enseigner la grammaire autrement »

この自由選択科目では、慣例的な教授法に頼りがちな文法教育を、新しい視点とメソッドで学習者に教え、習熟度を高めてもらうにはどうしたらいいかというテーマを扱った。特に印象に残ったのは、オランダ語やウォルフ語の文章を使って初見言語の文法を既存知識を活用して推測し、発見していく過程を体験を通して学んだ DAD (*Démarche active de découverte en grammaire*) という教育メソッドであった。DAD を日本人学習者にあてはめることを想定すると、日本人が義務教育で数年以上学んできた英語との比較によるフランス語文法の発見が考えられる。初級レベルの英文を同じ内容でフランス語と比較してみるだけでも、フランス語の名詞には性があり、形容詞などがその名詞の性数に合わせて一致することや、英語から逐語訳できない前置詞や表現もそれなりに存在することに気づくことができる。特に初級レベルの学習者にとっては、フランス語という未知の言語の文法を能動的かつ帰納的に抽出することができ、有効なメソッドではないかと考える。

Ⅱ.文化プログラム・余暇など

研修は朝 8:30 から 17 時過ぎまで内容が詰まっているものの、週末やフォーラムのない日は、ペタンク体験会が CLA の近くで開催されたり、スイス・ローザンヌへの日帰り旅行（有料：45€）に事前予約制で参加できる。ただ日帰り旅行は、長時間の移動も含めてそれなりに体力を使うので、ブザンソンの街中自体を見て回る時間との兼ね合いや自身のコンディションを考えて参加の予定を立てるのがよいと感じた。

Ⅲ.おわりに

今回フランス現地での貴重な研修の機会を与えてくださった日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、アンスティチュ・フランセ、そして在日フランス大使館関係者の皆様に改めて深くお礼申し上げます。私はまだフランス語教育の現場に実際に立ってはいないが、世界各地からの研修生との刺激ある交流や、将来の授業を想定した現地での documents authentiques の収集や撮影などの機会を通して、学習者や時代のニーズに応えられるフランス語教員になりたいという思いを、一層強くした次第である。



« Enseigner avec le théâtre, le mouvement et la gestualité » でのグループワークの様子

Rapport sur l'Université pédagogique d'été 2025 au CLA de Besançon

NAMBU

Au pied du massif du Jura, à la frontière avec la Suisse, j'ai suivi, du 4 août au 14 août, une formation d'été intensive en FLE au Centre de linguistique appliquée (CLA) de l'Université Marie & Louis Pasteur, en compagnie de stagiaires venus de chaque coin du monde.

Parcours « Enrichir les pratiques de classe »

Lors de ce stage, centré sur le parcours intitulé « Enrichir ses pratiques de classe », composé de trois modules, j'ai eu l'occasion précieuse de réfléchir en profondeur et de travailler la question suivante : comment amener les apprenants à être des acteurs, c'est-à-dire comment s'impliquer activement dans les contenus d'enseignements, et quelles méthodes pédagogiques sont les plus efficaces pour y parvenir ? Dans le module « Enseigner avec le théâtre, le mouvement et la gestualité », comme dans les approches actionnelles, où l'on définit les apprenants par le terme théâtral *acteurs*, j'ai senti que les activités d'apprentissage impliquant le mouvement corporel et la production vocale constituent un moyen très efficace pour graver dans la mémoire des apprenants le vocabulaire, les expressions, ainsi que les nuances de la prononciation et des émotions en français. En considérant la situation dans laquelle les apprenants japonais étudient le français comme deuxième langue étrangère, avec progression de l'apprentissage qui se fait souvent alors que le vocabulaire de base et les structures d'expressions fondamentales restent flous, en raison du peu d'heure de cours, on peut penser que même des activités simples – par exemple, reproduire en classe, tous ensemble, les gestes, postures et expressions vocales exprimés en français par l'enseignant, *Haussez les épaules ! Penchez-vous en avant ! Fredonnez !* - peuvent avoir une certaine efficacité. C'est aussi bien pour la consolidation de la mémoire que pour la création

d'une bonne ambiance dans la classe.

Ensuite, les modules « Introduire des activités ludiques et créatives en classe » et « Dynamiser les pratiques de l'écrit », en intégrant dans les activités d'apprentissage des éléments ludiques ainsi que des éléments stimulant la créativité, m'ont permis de réfléchir sur le moyen d'inciter les apprenants à s'exprimer activement en français et à améliorer leurs compétences en expression écrite tout en prenant plaisir à rédiger.

Les exemples d'activités présentés étaient vraiment variés, allant de petits jeux d'environ cinq minutes visant à détendre l'atmosphère de la classe en début de séance, jusqu'à la création de poèmes ou de textes originaux en imitant le style de Georges Perec (par exemple écrire un texte en français sans utiliser le voyelle *e*). Toutefois, il semble essentiel de réfléchir sur l'endroit où intégrer ce type d'activités dans l'ensemble du cours, et sur la nécessité pour l'enseignant d'évaluer avec soin l'équilibre entre le temps investi et les effets d'apprentissages attendus.

Module libre « Enseigner la grammaire autrement »

En plus du parcours principal ci-dessus, j'ai suivi un module libre, « Enseigner la grammaire autrement », dans lequel j'ai approfondi la question de savoir quelles approches peuvent permettre aux apprenants de s'approprier la grammaire comme règle qu'ils découvrent eux-mêmes de manière active. Parmi les méthodes introduites, la méthode *DAD* (*Démarche active de découverte en grammaire*) m'a particulièrement marqué. À propos du DAD, ce qui m'est venu à l'esprit, c'est l'activité dans laquelle un débutant japonais en français, en commençant à apprendre la grammaire de cette langue qui lui est inconnue, découvre sa structure grammaticale à travers une comparaison avec l'anglais, langue à laquelle il s'est familiarisé pendant l'enseignement obligatoire. En comparant l'anglais débutant appris au collège avec le français, les apprenants peuvent constater le genre des noms, l'accord des adjectifs et certains éléments grammaticaux sans équivalent en anglais.

Pour terminer, je tiens à exprimer ma profonde gratitude à la Société japonaise de

langue et littérature françaises, la Société japonaise de didactique du français, l'Institut Français du Japon, l'Ambassade de France au Japon qui ont contribué à l'organisation de ce stage. Bien que je ne sois pas encore engagé dans l'enseignement du français, ayant appris des divers exemples pratiques permettant d'améliorer l'efficacité de l'apprentissage tout en maintenant la motivation des apprenants, j'ai trouvé une source de motivation encore plus grande pour devenir enseignant de français.